
陰陽師と魔法使い

コーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽師と魔法使い

【Nコード】

N8678M

【作者名】

コーラ

【あらすじ】

関西呪術協会の若きエース、安倍^{あべの}晴宗^{はるむね}。安倍晴明の子孫にして多大なる才能を持つ彼に一つの任務が舞い込む。

「麻帆良学園にて長の娘、近衛木乃香を護衛し、関西呪術協会強硬派を殲滅せよ」

神鳴流剣士、桜咲^{さくらさき} 飛燕^{ひえん}と共に彼は関東魔法協会のある麻帆良学園

にて任務を開始する。

——総てはあの笑顔を護る為に。

独自解釈、独自設定、キャラ崩壊成分を多く含んでおります。ご注意ください。

序章（前書き）

初めまして。

コーラと申します。

更新遅い、気紛れですがお付き合い頂ければ幸いです。

序章

「…どうしてもやるのか」

森林の中に、円形に開けた草場。

月が照らすその場所に、二人の男がいた。

「やらねばならない。そうしなければ、明日は来ない」

「…お前はそういう奴だったな」

男はもう一方の男の言葉に決意を感じた。

そして、別れを感じた。

「今度会う時は、敵同士だな」

「手加減しねえからな」

そう言って、拳を男に突き出す。

もう一方の男もまた、拳を突き出して拳をぶつけ合う。

「「またな。相棒」」
バカヤロウ

そして二人は背を向けあい、振り返る事なくその場を後にした。

第一話

「神鳴流奥義…斬魔剣！」

少女の声と共に、野太刀から振るわれた衝撃波が異形を襲う。

その少女の傍では、長身で褐色肌の少女が二丁の銃を異形に向けて発砲して殲滅していた。

「龍宮、右を頼む！」

「了解！」

少女らは見事な連携で異形を斃していった。

——数分後。

森林の中にいるのは少女達だけになり、二人はふう、と息を吐いた。

「これで終わり…だな」

「ああ。そうだな」

「いやいや…強くなったな、刹那」

「「!？」」

木の後ろに隠れていた気配。

二人はすぐにその方向に向かって構え、臨戦態勢に入る。

「あー：そう身構えるなよ、刹那。俺だ」

そう言っ出てきたのはスーツ姿の男。

黒く、艶やかな長髪を後ろで一括りにして、左耳にある炎を象ったピアスが特徴的である。

「刹那。誰だい、この人は？」

先程、龍宮と呼ばれた褐色肌の少女が刹那と呼ばれた少女に尋ねた。

「桜咲 飛燕：私の義兄だ」

と、刹那本人も驚愕の表情で答えた。

「ほう：それはそれは…」

龍宮も言葉こそ冷静だが、胸中では驚いていた。

（まさか刹那のお兄さんだとは：しかも相当デキるようだね）

二人は警戒を解いて安堵した。

「その様子だとアイツにはまだ遇ってない様だな…」

「え？」

飛燕と呼ばれた男はポケットから札を取り出した。

「オン」

次の瞬間、札が輝きだし、飛燕は光の中に手を入れて引いた。手には刀が握られており、刀が出てくると札は光を閉ざした。

「『桜』…」

刹那が呟いた。

桜。それは桜咲家に伝わる名刀中の名刀。

桜咲家当主、または次期当主のみが持つ事を許された至高の打刀。

「刹那、長から伝言だ」

「長から…！？何でしょうか」

刹那はその言葉に身構えた。

「刹那…俺と戦え。負けたら木乃香お嬢様護衛の任は交代だ」

第一話（後書き）

いかがでしたでしょうか？

主人公でもない人がいきなり暴れてます汗

第二話（前書き）

連続です。

漸く主人公登場です。

第二話

男は逃げていた。

男の出来る限りの力を以て鬼を召喚したのに総て還されてしまった。最早選択肢は撤退しかない。

「こんばんは。高原さん」

「!？」

高原と呼ばれた男の前方に少年が立ち塞がった。

笑顔の少年は、まるで散歩中に友人に出会ったかの様な様子だ。

「晴宗^{はるむね}か…！ここは撤退する！付いて来い！」

そう言って走り出そうとするが、足元に匕首が投げられ、足を止める。

「どういうつもりだ！」

「どうもこうもありません。任務です」

晴宗と呼ばれた少年は笑顔で構える。

「んだとオ…！ざけんな！」

そう言って突撃する。

「安倍晴宗あべのはるむねの名に於いて命ずる！凍て尽くす氷よ！十の矢となりて射抜け！『氷弾ひょうだん・十矢じゅうや』」

指輪の嵌められた右手で宙に何かを描くかの様な動作をしながら晴宗は唱え、右手を男に翳す。

すると、右手から十本の光線の様なモノが男目掛けて襲いかかる。

「ッ！うわあああッ！」

晴宗に殴り掛かる算段もあって、防御出来ないまま次々と命中していく。

そして、高原という男の氷像が完成した。

晴宗は再び宙に模様を描きながら氷像に向かって歩く。

「安倍晴宗あべのはるむねの名に於いて命ずる。燃え盛る炎よ。一つの波動となりて爆ぜよ『炎掌えんしょう』」

そう言って氷像に手を着けた。

次の瞬間、掌から爆発が起こり、轟音と共に氷は融け、男は炭となつて息絶えた。

「爆ばく…終しゅう」

パンパン、と手を払い、静かに呟いた。

「…お嬢様の笑顔を絶やそうとする者、死して償うべし」

「なんで…どういふことですか!？」

「言った通りの意味だ…刹那ッ！」

飛燕VS刹那。

この戦いは飛燕が優勢であった。

刹那にとって負けたら心の支えの一つでもあるモノが無くなる。

それはもう二度と会えない様な気がした。

あの笑顔に。

——せっちゃん

「…おおおおおおおッ！！！」

刹那の動きが速くなり、彼女の持つ愛刀『夕風』にも殺気が籠る。

「そうだ…！それでこい！刹那！」

飛燕は次々と繰り出される刹那の剣技をいなしていく。

「神鳴流奥義！斬岩剣！」

大きく跳んだ刹那が飛燕目掛けて刀を振り下ろす。

避ける事は簡単だが、飛燕は敢えて対峙する。

「私は…負けられないんだあッ！」

「神鳴流奥義…千裂桜華斬」
せんれつおうかざん

——気が練られた剣が舞うように周囲を斬り裂く。

同じ神鳴流剣士といえども、飛燕と刹那には大きく差があった。それは経験、技量、気迫。

総てが飛燕に劣る刹那は成す術も無く斬り伏せられる。

「ここまでだな」

飛燕はそう言って刀を札に翳す。

すると札は再び輝き、桜を呑み込むかの様にして札に収めた。

ポケットから別の札を取り出し、全身切り傷だらけで血だらけで倒れている刹那に翳す。

「『治癒』」

すると、刹那の身体は青白い光に包まれ、その傷を完全に塞いだ。

そして札は破れ、ただの紙切れとなった。

「……………」

茫然となっている刹那。

心の支えの一つが無くなり、麻帆良にいる意味が無くなった瞬間だった。

第二話（後書き）

はい。早速ブレイク。
多くは語りません。

感想、ご意見頂けると大変励みになります。

【技解説】

『氷弾』

ぶっちゃけ魔法の射手。

後の話で説明もしますが、晴宗は陣を宙に描き、「安倍晴宗あべのはるむねの名に於いて命ずる！」で詠唱開始。この二つの動作と言葉は始動キーにあたります。

『炎掌』

属性が変更可能なゴッドフィン●ー。

光、闇は破壊。

炎は燃焼、爆発。

氷は凍結。

雷は感電。

土は捕縛。

「爆：終」といっていますが、あれです。
ヒート●ンドです。

第三話

「刹那、強くなったな」

「…でも…私は…」

眼が虚ろな刹那。

龍宮は気まずそうに二人を見ている。

「合格だ」

「「…えっ？」」

刹那と龍宮の声が被る。

「いや、単に刹那の実力が見たくてな。嘘を言ってみたんだ。悪いねー」

そう言って飛燕は笑った。

しかし、刹那にとっては一大事でもあるのだ。

「…ひっく…えぐッ…」

「お、おい刹那」

「…」

龍宮が慌てて刹那に駆け寄る。

刹那は安堵のあまり泣いてしまったようだ。

「…」

龍宮はジト目で飛燕を見つめる。

飛燕は苦笑しながら刹那を立たせた。

「ホラ、立て刹那。悪かったって」

「うう…」

「…やりすぎたんじゃないのかい？」

「かもね」

そんな三人の所へ、修道服を着た女性が駆け寄ってきて茫然としていた。

「あ、飛燕さん」

そのあと、飛燕らは神木・幡桃と呼ばれる巨大樹の前の広場に来ていた。

そこには晴宗の姿もある。その傍には学園No. 2と謳われる広域指導員、『死の眼鏡^{デスメガネ}』ことタカミチ・T・高畑もいた。

「よお晴宗。俺が先だったわ」

「…その様子だと、刹那、泣いたみたいですね」

晴宗は苦笑する。

「…え？晴宗？」

「お久しぶりです。刹那」

刹那は最早訳が分からなくなっていた。
本来ここにはいない筈の二人がここにいることに。

「え、あ、ああ…久しぶり」

（こんなに動揺する刹那も珍しいな…）

龍宮は少し下がったところで観察していた。
少しすると、広場に続々と人が集まってくる。
時刻は深夜一時を回っているのに、だ。

共通するのは、皆常識では有り得ない力『魔法』を知り得る者達。
所謂魔法先生、魔法生徒である。

「さて、皆集まったようじゃのう」

そして、最後に高齢の男性が現れた。

（…ッ！？ぬらりひょん！？）

晴宗は思わず身構えてしまう。

「大丈夫だよ、晴宗君。あの方が僕らの長さ」

タカミチの言葉に安堵する晴宗。

晴宗が高原という雑魚陰陽術師を葬った後、タカミチに発見され、事情を話してここまで連れて来てもらったのだ。

「おっほん…今日、皆に紹介したい人物がおる。では、頼むぞい」

「「はい」」

その言葉に続き、一歩前に出る飛燕と晴宗。

（凄いなあ…あんなぬらりひょんを見ても飛燕さんは微動だにしないなんて）

と考えていたが、

（駄目だ…以前一度だけ会った事があるが、何度見てもぬらりひょん。動揺するわ）

と、全く違う事になっていた。

「初めまして。関西呪術協会所属、神鳴流剣士桜咲飛燕と申します」

「同じく、関西呪術協会所属、安倍晴宗と申します」

「この二人が今日から諸君らの仲間として行動することになる。宜しく頼むぞい」

「関西呪術協会…!?!」

「信用できるのか…?」

周囲から聞こえてくるのは疑問の声ばかりであった。
それも当然である。

関西呪術協会は関東魔法協会とは仲が良くない。
それも、双方の長の血縁、近衛木乃香が西から東へ移住した事でエスカレートしているのだ。

「学園長！私は反対です！」

褐色肌の眼鏡をかけた男性が声を荒げた。

「関西呪術協会の者など信用できません！手引きして結界を破るかもしれないですよ！」

「なら監視でもなんでもすればいい。信用は勝ち取るものだしな」

飛燕は興味も無さそうに欠伸をしながら言った。

「ガンオルフィーニ君。言いたい事は解る。しかし事態が事態なのじゃ」

「…？」

全員が首をかしげる。

そもそも、今日に限っては何か集まりがあるわけでもなかった。
そこに緊急の集会に加え、二人の乱入者である。

ガンドルフィーニだけでなく、一部の魔法先生や魔法生徒も不審がっていた。

「実はこのままでは東の西の全面戦争になりかねんのじゃ。」

故にこの二人を助っ人として西から派遣してもらったんじゃよ」

第三話（後書き）

連投疲れました。。。

中途半端ですがお許しください汗

第四話（前書き）

ようつべでアニメの魔法先生を視聴。
やっぱネギ嫌いだべ

第四話

翌日。

晴宗と飛燕は学園長室にいた。

「改めまして、お初にお目にかかります、関東魔法協会会長殿」

「うむ。安倍晴宗君、桜咲飛燕君、よくきてくれた」

「学園長とは十五年ぶりですか」

「そうじゃのう。木乃香の出産時以来じゃな」

飛燕とぬら：近衛門は以前に会った事があった。
それは今回の任務の護衛対象の出産だったのだ。

「学園長殿、こちらが親書です」

晴宗はスーツから一枚の紙を取り出す。
それを渡し、近衛門は中身を熟読する。

「うむ：」

「学園長」

「ん？なんじゃ」

飛燕が静かな面持ちで口を開く。

「我々は木乃香お嬢様に関係の無い事は関与しませんので」

「ふお?…ふうむ、了解じゃ」

(なんと…この親書には大まかな事は書いてあるが細かい事は二人と話し合って、と書いておったからネギ君のサポートでも頼もうと思っておったのにお…)

「では、晴宗君は春休み終了後の新学期から生徒として2－A、いや、3－Aに編入してもらおうかのお。飛燕君は女子中等部の寮の管理人を頼んでよいかのお」

「承りました。それと、こちらが敵に関する書類です」

飛燕は鞆から書類封筒を取り出し、近衛門に渡す。
それをパラパラと見ながら尋ねる。

「この者らが強硬派主要メンバー『斑鳩』かね」

(…ん?この者は…まさか?)

近衛門は書類を見て、或る人物に目がついた。

「晴宗君。君は本当に…、リーダーの彼を討てるかね?」

「…はい」

晴宗ははっきりと言った。

「『斑鳩』のリーダーにして僕の兄…『安倍^{あべの}黎明^{れいめい}』は僕が討ちます」

「しかし…彼らは本当に信用できるのかね」

ガンドルフイーニは同僚の神多羅木に言っていた。

「…さあな」

「昨日の緊急集会では一応の説明で、今日改めて集合がかかっているが…」

「…ううむ…」

ガンドルフイーニは未だ納得できていなかった。

「ここか」

「ですね」

晴宗と飛燕は女子寮に来ていた。

晴宗は飛燕と共に管理人室に住む事も決まり、家の整理の為に来ていたのだ。

「こおーらーこのネギ坊主！またやってくれたわねー！」

「ん？」

大きな声が寮のドアを越えて二人の耳に入ってくる。

二人は取り敢えず寮の中に入って何が起こったのか見ようとした。

「何回くしゃみでスカート捲るなって言ったら分かるのよ！」

「あぶぶ…ご、ごめんなさいアスナさん！」

二人が見たのは、子供とは言え少年を片手で胸倉を掴んで宙に浮かせている少女。

その傍らには――

「やー、凄い風やったなー」

「あ…」

護衛対象、近衛木乃香がいた。

「…ふえ？」

「あ…お…お嬢様…」

「え…まさか…ハル君？」

「お…お久しぶりです」

顔を真っ赤にして答える晴宗。

晴宗は昔から木乃香の事が好きなのである。

「ハルくーん！めっちゃ久しぶりやねー！」

木乃香は晴宗の手を握って笑う。

「え…アンタ達…このかの知り合い？」

「はい。私は桜咲飛燕、こちらは安倍晴宗と言います」

これが、最初の出会いだった。

第四話（後書き）

ネギ嫌いなので敢えてほぼ空気に（r y

ちよいちよい場面吹っ飛んできますがお許しください。

第五話

五人は自己紹介も終え、寮のロビーで話をしていたが一人、燃え上っている者がいた。

「ほお：僅か十歳で大学卒業か。凄く頭がいいんだね、ネギ君は」

「いえ、僕なんかまだまだ未熟ですよ」

——なんでこいつがなんでこいつがなんでこいつが

「そうよねー。出会い頭に『失恋の相が出てる』なんて言うし」

「んー？ ハル君、どうしたん？」

——三カ月もの間お嬢様と一つ屋根の下…ふざけている

「ハル君？」

「え？ なんでもないですよ、お嬢様」

——決めた。何か理由を作って殴る。でもって同棲解消させよう。

明日菜、ネギ、飛燕で会話し、木乃香、晴宗で会話する五人。

（何故こんな奴がお嬢様と同棲…なんてうらやm…否！ ふしだらなッ！…！）

そう、晴宗である。

先程から晴宗はネギに嫉妬の炎を燃えあがらせていたが、全く気付かれていない。

「さて、俺達は準備があるからもう行くよ。分からない事があったら訊くと思うが、宜しく頼むよ」

「はい！さようなら！」

ネギは元気よく挨拶をし、明日菜、木乃香と共に部屋へ帰って行った。

「…気付いたか？ハル。あの子供…西洋魔術師だ」

「……」

「ハル？…ハル？おい」

「…ハッ！」

「…どうした？まさかあの子供に嫉妬か？」

「…イイエ、何デモナイデス」

「…」

二人は無言で管理人室へ向かった。

（しかし…西洋魔術師がお嬢様の部屋に住んでいるとは…調べてみる必要があるな）

飛燕は一人密かに、ネギに対する警戒感を強めていた。

夜。

改めて集会がある。

「さてさて：昨日の今日ですまんのお諸君。改めて紹介しよう。関西呪術協会の桜咲飛燕君と安倍晴宗君じゃ。二人は西のエースであり、諸君らの実力に引けはとらぬ強者じゃ」

「それで学園長、東と西の全面戦争とはどういった事ですか」

世界樹前の広場で近衛門をはじめ、魔法関係者が集う中、ガンドルフィーニや一部の者達は不快感を隠さずにいた。

「ワシの孫娘の木乃香がここにいる事は諸君らも知る事じゃろう。西から東、麻帆良に来た事で西の強硬派がそれを不服とし、世界樹の魔力と木乃香を狙っておるわけじゃ。木乃香は魔法の事は知らぬが、保有する魔力量は極東一。それを狙う輩で危険なのが出てきたので、西と東の和解の一步として二人に来てもらったのじゃ」

「スパイであるという可能性はないんですか？」

「それに関しては西の長の直属部隊所属の二人じゃ、心配いらぬわ。それでも不満なら諸君らで監視するがよい。二人もいいと言っておるしう」

次々と出てくる疑問に飄々と答える近衛門。

飛燕と晴宗は隅で静かにその様子を見ていた。

「そういえば学園長。ネギ君は？」

「彼はまだ子供じゃから呼んでおらんよ。それにしても、どうして解ったんじゃ？魔法先生だと」

「昼に遇いましたが、魔力が漏れていましたし。でも、こちらは気を抑えていたので一般人だと思われてます」

「ほう：そうかそうか」

近衛門が髭を撫でながら飛燕の疑問に答えた時、二人の脳裏に言葉が響いた。

【お前達か、近衛詠春の直属部隊『鴉』の者は】

（（！？））

周囲に悟られないように声の主を捜す。

【お前達のちょうど真正面にいる】

二人が見ると、金髪の少女がいた。

【念話か。金髪の子供がこの声の主だな】

【クク：そうだ。】

【あの姿：長が仰っていた、『闇の福音』ですね】

【その通り、私がエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ】

「…さて、取り敢えず二人には模擬戦でもして實力を見せてもらおうかのう」

【終わったら私についてこい】

【…解った】

飛燕はそう言うと、近衛門に向き直る。

「学園長、我々は一組で戦っていますので、チーム戦でもよろしいですか？」

「よからう。では、葛葉君、神多羅木君、高音君、頼むぞい」

三人が前に出る。

「学園長、二対三ですか？それは…」

「何、問題要らぬわい」

近衛門は静かに笑っていた。

「学園長も人が悪い…僕の前鬼、護鬼を出させる算段ですね」

晴宗は小声で飛燕に言った。

「だろうな。刀子さんに加え、あのサングラス…やり手だ。そうみて間違い無い」

「まあ、流れて出します」

二人も前に出て、構える。

「それでは…始めッ！」

学園長の合図と共に神多羅木は大量の風の刃を二人に送り込む。それぞれ左右に避けて対応するが、飛燕には刀子、晴宗には高音が迎撃に回る。

「…お久しぶりです」

「そうですね…でも、そんな余裕あるのですか!？」

刀と刀がぶつかり合い、火花を散らす。

飛燕は涼しげに立ち回っていた。

「おっと…つと！」

一方、晴宗は風の刃と影の槍を避け続けていた。

熟練度の違いからか、神多羅木の攻撃はストレスで避ける。

高音の攻撃は避けるのにある程度の余裕があるが、神多羅木と続けざまに撃って来るので反撃もままならない。

「どうしたんですか!?! 西のエースらしいですが、この程度ですか!」

高音は影を身に纏い、晴宗に突撃する。

「いやゝ…女性に、こうげ、つきするのゝつとと！どうかと思いまして！」

避け続けていた神多羅木の攻撃が一旦止んで、高音一人が近接戦を挑んでくる。

「優しいですけど、この影の前では意味が無いです！」

「おっと…」

高音は自身の最強モードである『黒衣の夜想曲』を発動する。それを見た晴宗は懷から一枚の札を取り出す。

「神鳴流奥義、斬空閃！」

「神鳴流奥義…斬魔剣、弍の太刀」

飛燕と刀子の決着は飛燕の勝利であっさり終わりを告げた。

「刀子さん…」

「ぐっ…何ですか」

「…少し、弱くなりましたね」

そう告げる表情は、何処か切なそうであつた。

刹那は晴宗は無視し、飛燕と刀子の戦いを終始見続けていた。

二人の剣技は冴え渡っており、思わず見惚れていた。

しかし、飛燕の最後の技で刹那に衝撃が走った。

――斬魔剣、式の太刀。

それは神鳴流宗家、青山家の者にしか伝えられない秘伝の技。

宗家の血があるとはいえ分家の桜咲家には伝えられない。

（いや…でも義兄さんは歴代最強の剣士…長ですら全盛期でも負けると仰っておられた上、あの方に教えられているかも知れないから習得していてもおかしくは無い。しかし…）

刹那の視線に気づいたのか、飛燕は目線だけ刹那に移し、口元を歪めて微笑った。

「さて、晴宗はっと」

飛燕が晴宗の方向に目を向けると、丁度晴宗が高音に一撃を入れて気絶させ、高音の背後にいた巨大な黒い人形の様なモノを消していた。

そして、その目を見て気付く。

（…あ、鎧は無いけど『憑依武装』させたな。しかもあの動き…）

「狼鬼ろうきか」

ポツリ、と呟いて『桜』を札にしまった。

「よし、そこまでにしようかのう」

近衛門が声をかけ、晴宗は神多羅木に飛びかかろうとするのを止めた。

「諸君らも実力が解ったと思うので今日はこれで解散じゃ。警備シフト等に関しては明日連絡するからのう」

そういうと近衛門はフオフオフオ、と笑いながら歩いて消えていった。

「お疲れ、晴宗」

「あんまり手の内晒さずに済みました…よね？」

「まあね。俺は弑の太刀を奮起剤代わりに刹那に見せた」

「…よかったんですか？」

「刹那には強くなってもらわないとね」

飛燕はニツと笑った。

「さて、帰って寝ましょう」

晴宗が欠伸をしながら背伸びをして言った。

「おい。お前私の事を忘れてるだろ」

「…ハッ」

第五話（後書き）

長くしてみました（何

憑依武装については次回説明予定です！

やっぱネギ駄目。

僕のこのかを（r y

第六話（前書き）

バイトばかりで忙しいです。
出来る限りの更新。

第六話

模擬戦の後、晴宗と飛燕はエヴァの別荘に来ていた。

「さて、近衛詠春から話は聞いている。近衛木乃香の護衛、魔法バ
レの防止、斑鳩の殲滅がお前達の任務だそうだな」

「そうです」

エヴァの問いに晴宗は涙目で答える。

というのも、晴宗はエヴァの件を忘れていたせいで従者の茶々丸か
らロケットデコピンを食らったのだ。

「クク：魔法バレは案外早くバレるかも知れんぞ？」

「「：！？」」

その言葉に二人は表情を変える。

「何故です？」

「あのネギとかいう西洋魔術師：か」

「そうだ。察しがいいな、桜咲飛燕」

「え、ネギ君で魔法使い何ですか?!」

「：お前気付いてなかったのか」

晴宗は飛燕にネギが西洋魔術師である事を告げられたが、その時は嫉妬で頭が占められており、飛燕の言葉に耳を貸していなかった。

「坊やが神楽坂明日菜、近衛木乃香と同居しているのは？」

「知っています。昼に寮で偶然遇って話しましたし」

「神楽坂明日菜には魔法が既にバレているぞ。それに、坊やは『千の呪文の男』と謳われたナギ・スプリングフィールドの息子だ。あわよくばジジイは従者に仕立て上げようとしているかもしれない」

エヴァはニヤニヤしながら告げた。

その言葉を聞いて晴宗の目が一瞬にしてケダモノの目になり、エヴァと飛燕に背を向けて砂浜に向けて歩き出す。

「…どうした？ ハル」

「修行ですよ」

そういう晴宗のオーラに、『ネギとかいうガキは僕が潰す』という文字が読み取れた二人だった。

「しかし…焚きつけるのが上手いですね、アナタは」

飛燕は茶々丸が淹れた紅茶を啜りながらエヴァに言った。

「近衛詠春からお前達の情報は入手している。出来たらサポートもしてくれ、ともな」

「成程…」

「頭も切れる、とも詠春は言っていたな。相当のお気に入りだ」

「まさか」

と飛燕は謙遜する。

二人は晴宗が出した式神の『狼鬼^{ろうき}』、『龍鬼^{りゆうき}』、『蜘蛛鬼^{くまぎ}』が晴宗に稽古をつけるのを見ながら静かに話し合う。

「まあ、魔法バレに関しては明日にでも手を打ちますか」

「クク：お前にいい情報をやるよ」

エヴァがそういうと、茶々丸が数枚の紙をテーブルに置く。

「…？」

飛燕はそれを見ると、不思議がっていた表情が呆れに変わった。
内容はネギのこれまでの行い。

教師に就任初日にして魔法バレ、一般人の目の前で読心術の使用などである。

「魔法の秘匿に関して、これは無いな…」

「これだけあれば、お前ならば上手くやれるだろう？桜咲飛燕よ」

「飛燕でいいですよ。それにしてもこれは：学園長め、長の配慮やお嬢様への想いを裏切ってこのような事までするとは…」

「まあ、情報料代わりにお前達の戦い方やあの式神の事でも教えてもらおうか？」

エヴァが顎で指した先には、狼鬼にフルボッコにされて倒れている晴宗の姿があった。

「うう…」

「主よ。先程の場面で近接戦に持ち込んだ時、爆撃の炎掌でなく、零距离で捕縛の風掌ふうしょうを使用してから『迸る大地』を使うべきだったな」

狼鬼は弓に似た形の大剣を肩に乗せながら晴宗にアドバイスをしている。

「そうすれば四方を囲まれるから、障壁で防ぐしか手立てが無くなる。そこを龍鬼が主が上空から一撃を見舞えば、そこら辺の者ならば殺とれていたぞ」

「しかし…僕が風が苦手なのは知ってるでしょう」

「無論だ。しかし克服し、実戦で使えるようになる為の修行だ。主が我等と契約した以上、主には強くなってもらわねばならん」

「…そうではなくては、黎明に勝てんぞ」

龍鬼はそう言って晴宗に向かって構える。

「今度は『雷の龍鬼』が相手となろう。来い。主よ」

「…僕は…」

晴宗はその言葉を聞いて立ち上がり、構える。

「兄さんを殺す！！」

晴宗は走り出し、詠唱して攻撃を仕掛ける。

目の前の龍鬼に黎明を重ねながら。

「安倍晴宗、乗せられやすいのだな」

「良くも悪くも真っすぐです」

エヴァと飛燕は紅茶を飲みながらまったりしていた。

「それにしてもこの紅茶は本当に美味しいな。今度よければ淹れ方を教えて頂けるか？絡繰」

「茶々丸とお呼び下さい。私でよろしければ、喜んで」

茶々丸は無表情のまま答える。

エヴァはフン、と小さく言って飛燕に向き直る。

「久々にお前の実力が見たい。相手をしろ」

「…解りました」

そう言って席を立つ。

「歴代最強と言われた青山鶴子に勝って妻にしたその本気を出せよ？」

「いやいや…」

飛燕は苦笑しながら懷から六枚の札を出し、晴宗達とは離れた砂浜でエヴァと対峙する。

「神鳴流剣士、桜咲飛燕…圧して参る」

そして、飛燕の六枚の札が輝きだす。

「…」

山の峠から遠く離れた麻帆良学園を見つめる一人の男がいた。

「全員揃いましたえ」

男の傍に少女が歩み寄ってくる。

少女の後ろには、十数人の者達。

皆、関西呪術協会内では強硬派であり、その一部は『斑鳩』のメンバーである。

「はよ行きまへんか？さっさとお嬢様奪って…」

「千草」

「は、はいっ」

男の言葉に天ヶ崎千草はビクッ、と身体を震わせる。

男からはその場にいた全員が身体を固くさせるほどの殺気が放たれていた。

「合図は俺がする。『今は』俺が斑鳩のリーダーだからな」

「はいっ」

千草は完全に萎縮した。

「時は来た。今こそ木乃香お嬢様を手中に収め、強き、誇り高き東洋術師の姿を取り戻す！」

全員に激を発する男。

その男こそが、斑鳩のリーダーにして安倍晴宗の実の兄、『安倍黎明』。

「明日の正午より任務を開始する…お前ら、解ってるな？」

黎明の言葉に数人がニタリと笑う。

「手柄は早い者勝ち。隊長の座は勝った者勝ち。それが俺達斑鳩だ。ただし、一般人に怪我はさせるな。術師の誇りに賭けて誓え。それだけが今回のルールだ。ただ、敵の生死なんぞ知った事じゃねえ」

黎明は目を一旦閉じ、深呼吸してから目を開いた。

「散ッ！」

すると、黎明と二人を除いて全員がその場から去った。

「なー、黎明の兄ちゃん。西洋魔術師って強いんか」

「…中には強い奴もいる。油断するなよ？小太郎。それがお前の唯一の悪い癖だ」

「…ハッ！油断なんかせえへんわ。本気でやれば西洋魔術師なんざ一発や」

狗族のハーフ、犬上小太郎。

この少年もまた斑鳩に加わって参戦していた。
そして、小太郎もまたこの場から走り去った。

「…月詠」

「はいな？」

「…迷惑掛けるな」

「いいえ、全然そんな思ってまへんえ」

黎明は表情を曇らせるが、月詠と呼ばれた眼鏡をかけたゴスロリ風の格好をした少女は笑顔で答えた。

——斑鳩第一陣？名襲撃まで、あと十時間。

第六話（後書き）

バイト疲れますた。

日曜十五時間、火曜九時間、水曜九時間、木曜四時間、金曜九時間。

今週の私のバイトスケジュールです。

乙です。

あと、憑依武装については書く予定でしたが内容を若干変更した為に次回以降に持ち越しです。
申し訳ありません。

評価いただけると励みになります↑

【解説】

狼鬼
ろうき

安倍晴明が契約していた式神の一体。
五芒星で風を司る。

モデルはガオレンジャーの狼鬼。
現在の主である晴宗に忠実に仕えている。
しかし、稽古では容赦しない。

龍鬼
りゅうき

同じく安倍晴明契約による一体。
雷を司る。

モデルはドラゴンオルフェノク。

主の晴宗に仕えているものの、あまり納得していない。

その為、狼鬼以上に積極的に稽古をつけて強くさせ、仕えるに相応しい、安倍家の次期当主として相応しい実力を身につけてほしいと願っている。

蜘蛛鬼^{くま}

同じく（ry

大地を司る。

モデルはタランチュラアンデッド。

寡黙。

戦闘力は高いが、補助や諜報なども出来る。

日本茶が好物。

第七話（前書き）

随分前に七話を投稿したのに何故か反映されず、表示されず。
この非情な仕打ちに全俺が泣いた。

プロットなんかありません。
ノリだけで書いてますから！

第七話

「という訳じゃネギ君。明日から職員寮の方で暮らしてもらおう事になったんで頼むぞい」

近衛近右衛門はネギに引越しする事を伝えた。

ネギは驚愕の表情を浮かべ、涙目になりつつある。

「そういう訳だ、ネギ君。元々お嬢様達との同棲は空気が見つかるまでの話だったしね」

笑顔で告げる桜咲飛燕。

その表情を崩さぬまま、近右衛門に顔を向ける。

【…解ってますね？】

【も、もちろんじゃ！】

ネギが来る前、学園長室で飛燕は近右衛門と二人で『お話』をしていた。

その結果、これである。

「え、でも僕は…」

「なんだい？」

「今までずっとお姉ちゃんと一緒に寝てたから…」

最後の方は口ごもって何を言っているか二人には聞こえなかった。

だが、飛燕にはエヴァからもらった情報である程度を察した。

「確かに10歳は子供だ。しかし君は『立派な魔法使い』の修行をここで行い、『大人』の教師として扱われている。きっちり分けねば君の為にならない」

「う…」

完全に涙目。

飛燕はその後も優しい口調でネチネチといたぶっていた。

数分後。

ネギは完全にKO。

学園長室から出た後、静かに啜り泣く声が授業中で誰もいない廊下に響いた。

「飛燕君、やりすぎじゃないかのお」

「え？全然ですよ。寧ろこれからが本番ですよ。学園長？」

笑顔のまま指をパキポキ鳴らす飛燕。

「まさか長に無断であの様な事をなさったり不祥事を見て見ぬふりとは…」

殺気の籠った目が近右衛門を見据える。

そして、笑顔は凶器へ。

「さあ…あなたの罪を数えましょう」

「ふは…極楽う…だった」

晴宗は昼前に風呂に入り、散歩をしていた。

「…でも暑い」

春にしては今日は気温が高い。

そうこうしているうちに、世界樹前の広場へきていた。

時刻は正午三分钟前。

「飛燕さんは話があるとかで学園長室だし…エヴァさんに魔法球借りるのは夕方だし…暇」

独り言をぼやきながら傍のベンチに腰を下ろす。

この広場には晴宗一人。

どこか征服者の様な気分になった。

空を見上げていると、鳥が二羽飛んでいる。

「…さて、いっちょやりますか」

晴宗はベンチから立ち上がり、階段に目を移す。

「流石に気付くか」

「まあ、隊長の弟だし、出来て当然でしょ」

階段を上がって姿を現したのは二人の男。

「人払いするなんて意外です。ルール無用の斑鳩なのに」

「隊長の命令でな。一般人に怪我させんなだよ」

「…でも」

時刻は、正午。

時を告げる鐘が鳴り響く。

「テメエが死ぬのはオツケーだとよおお!!」

その瞬間、二人は服の袖から小太刀を取り出し、計四本の刀で晴宗に襲いかかった。

「甘い」

という晴宗の言葉と、グシャッ、という二人が踏み潰されて肉の塊になる音が重なった。

「…だから言ったのに」

「何も言っていないだろう、主よ」

二人を踏み潰したのは狼鬼と龍鬼。

晴宗は二体を鳥に変化させていたのであった。

「え？甘いって言いいましたよ？」

「文脈あまり繋がっていないぞ」

「…まあ、カッコヨク決まったから良し、という事で」

【…主】

晴宗の頭に蜘蛛鬼の声が響いた。

【…敵を三名斃した】

【ご苦労様です。そのまま警戒してください】

【…御意】

「五人か…作戦開始と読んで間違いないな」

「そうですね」

「主、我等はどうする」

「龍鬼は西、狼鬼は北をお願いします。僕は一旦飛燕さんと合流します」

「東はどうする？南は蜘蛛鬼が受け持っているが」

「ああ、大丈夫ですよ。あそこには…」

——同時刻

「グギャアッ」

「ゲヒッ」

矢張り人払いの結界の中、二人の少女が戦っていた。

一人は銃で撃ち抜き、一人は剣で斬り裂く。

龍宮真名と桜咲刹那だ。

「これで残りはお前達二人だけだな」

刹那は剣を構え、前方に佇む陰陽術師と神鳴流剣士を睨んだ。

「おー怖。護衛剣士も大変だねえ」

「デスヨネー」

「あの二人を排除すると…50万か。低いな」

龍宮は溜息交じりに呟くと、傍に置いてあるギターケースの中からサブマシンガンを2丁取り出す。

「まあ、死んどけ」

その言葉と共に、札を取り出して術を放つ。

刹那は剣士を相手に切結ぶ。

龍宮は札から放たれる炎を避けながら引き金を引くが、動いて避ける上、障壁に阻まれて中々当たらない。

「神鳴流奥義、斬空閃！」

「神鳴流奥義、斬魔剣！」

一方刹那は奥義で衝撃波を飛ばすものの、相手の斬魔剣に阻まれる。実力でもそうであるが、刹那は押され気味だ。

そもそも、相手は斑鳩。

実力は皆関西呪術協会でもトップクラスに位置する者達である。

まだ未熟な面のある刹那が押されるのだ。

それに、時々炎が飛んできて邪魔が入る。

龍宮も負けじと隙をみては相手剣士に銃を放つが総て避けるか斬り落とされてしまう。

「マズいな」

「どうする？」

「中々やるねえ」

「でもまあ、君らじり貧だわ」

——刹那

敵二人の首が落とされた。

「やゝ、間に合うたわ」

「な!？」

龍宮はすぐさま臨戦態勢に入る。

一瞬で二人の後ろに現れ、居合斬りで首を斬る。

――間違いない。強い。

「お久しゅう、刹那はん。そちらの方も、ウチは味方やから」

物腰の柔らかい京都弁。

神鳴流の戦闘装束。

野太刀に括り付けられた鈴がチリン、と鳴った。

「刹那…知り合いか？」

「あ、ああ…」

刹那は冷や汗をかきながら答えた。

「桜咲鶴子さん…飛燕義兄さんの妻だ」

第七話（後書き）

短いけどリハビリ。
のんびりいきます。

第八話（前書き）

暫く忙しいので短いかもしれませんが更新。

第七話でアクセス一気に伸びたのに吹きましたW↑

何はともあれ、宜しくお願いします。

第八話

「クソッ！白昼堂々来るなんて！」

北の橋。

そこは、原作ではネギがエヴァンジェリンと初対決の際に捕縛結界を設置した場所である。

この世界ではまだ未来の出来事であるが。

ガンドルフィーニは弐集院と共に鬼の迎撃に回っていた。

しかし、鬼達の実力はともかく数が多い。

術者も見つけていない為、こちらは人海ならぬ鬼海戦術でじり貧になっていくのは明らかであった。

「ガンドル君！突っ込みすぎるな！」

「ぬッ：しまった！」

後の祭り。

ガンドルフィーニと弐集院は鬼に囲まれて分断された。

二人の実力は学園内では中の上に位置する。

しかし、弐集院はどちらかというと補助専門の魔法使いである。

弐集院が捕縛魔法などで鬼の位置をある程度固定し、ガンドルフィーニの銃で撃つ。

近接戦では弐集院は魔法の射手で迎撃して距離を取り、ガンドルフィーニはCCCという軍隊で採用されている格闘術でねじ伏せる。その戦法で鬼を斃していたが、鬼とて馬鹿ではない。

その対策が分断からの各個撃破、である。

「オオオオッ!!」

叫びながら銃を撃ち、近づく敵をナイフで切り捨てるも鬼は減らない。

寧ろ増えているようにすら感じる。

——マズイ、このままでは

そう焦りを感じた瞬間であった。

「ギャオオオッ!!」

二人を囲んでいた鬼の一部が煙となって還っていく。

「なんだ!?!」

鬼を斬り裂くブーメランの様な大型の剣は弧を描きながら持ち主の所へ。

そこには、ダークブルーの鎧に身を包み、黄金に輝く瞳が印象的で、一本の角を生やした銀の人狼。

「主が命により、風の狼鬼…推参」

「飛燕さん! 敵です!」

晴宗は連絡用の札で飛燕に念話を送るが返事が無い。
それもその筈であった。

何故なら――

「神鳴流奥義、千花繚乱！」
せんかりょうらん

絶賛戦闘中であつた。

近右衛門の罪があらかた数え終わつた時、晴宗が知らない内に張つていた感知結界に敵が引つ掛かつたのだ。
その為、中断して現場に急行し、敵を斬っていた。

「クソッ、札よ、我を逃がさんかい！『京都 大文字』！」

術師の男は炎の壁を展開して脱出を試みる。
しかし、神鳴流最強と謳われる飛燕には意味が無かつた。

「…我流」

「!？」

耳を疑つた。

神鳴流剣士は皆神鳴流の業を扱う。

そして、それこそが神鳴流剣士として存在している事の証でもある。
なのに、炎の向こうの男は静かだが、辺りに確かに聞こえる声を響かせた。

「鳴神」
なるかみ

次の瞬間、炎を突き破り、自身に迫る雷が男の最期に見た光景であった。

…何で通じないのかなあ？

僕は寮に向かって建物の屋根を走っていた。

蜘蛛鬼達の報告だと敵や鬼は順次撃破…でも、何故外側からなんだ？お嬢様の誘拐なら直にお嬢様がおられる場所に向かえばいいはず…

お嬢様は現在、寮に住む学生の為の料理教室に参加する為に学校におられる。

そこにはシスターシャークティと呼ばれる方が護衛で待機しているはず。

飛燕さんは大丈夫。

あの方は強い。

本来なら、僕は行った事無いけど魔法世界という魔法が『アタリマエ』にある世界でも有数の剣士として名を成していたハズの程だし。

でも…クソッ！

僕は一気に距離を縮める。

よし、あと少し！

そう思っていたら、横から黒い狗が飛んできた。

「おっと！」

「…何や、ハル兄いか。折角西洋魔術師と戦^やれる思ったんやけどな
ー」

そう言って僕の前方に立ち塞がるのは僕と少し年の離れた仲間、犬上小太郎君がいた。

「コタロー君…どいて」

「無理やな。折角やし、勝負しようや。まあ？どーせ俺が勝つけどな。あのバカ強い式神おらへんハル兄いに近接戦はムリやろ」

「…」

僕は静かに構える。
言っても無駄。

なら――

「排除する」

そして、僕は詠唱を開始する。

「片付いたな」

「だね」

西の森。

そこではタカミチと龍鬼しかいなかった。

元々一人でも強いA A+の実力者であるタカミチに加え、龍鬼が加わって鬼と術達は一気に片付いた。

「でも殺すのはやりすぎじゃなかったかな？せめて捕らえて情報を無駄だ」…」

「奴らは喋る程情報を持っていない。『勝てば官軍』といった連中なのでな。仮に情報を持っていて、捕らえても喋りはしない」

「そうだ。よく解ってんな」

「「!？」」

そこに、一人の青年が現れた。

黒い髪の中に赤のメッシュが入り、右の耳には炎を象ったピアス。

「安倍…黎明だね」

タカミチは煙草を吹かした手をすぐさまポケットに入れて戦闘態勢に入る。

（我が気付く事無く此処まで来ただと…!?!?）

「その通りだ、『居合い拳』のタカミチさん」

「よく知ってるね」

「有名ですよ。長…いや、近衛詠春のいた『紅き翼』の一員ですしね」

「いきなり隊長が来るなんて予想外だよ。でも、ここで君を捕らえたら大きいね…！」

タカミチは居合い拳を数発放つ。

しかしそれは全て障壁に弾かれる。

「不可視だが、来る、って感覚は解る。安倍黎明の名に於いて命ずる」

「させぬ！」

龍鬼はすぐさま雷撃を放って妨害しようとするが、突如上空から降ってきた炎に遮られた。

「…烏鬼^{うぎ}か！」

「『燃ゆる咆哮』」

「「…!!」」

黎明の前方は、爆発に包まれた。

「いやー、助かりました、蜘蛛鬼さん」

南の警戒に当たっていた瀬流彦、神多羅木は援軍に駆け付けた蜘蛛鬼のサポートもあって楽に敵を撃破した。

「…礼には及ばぬ。我が主の命なれば」

「…」

神多羅木は煙草を取り出し、一服し始めた。

（うーん…なんかシュールな光景だなあ）

瀬流彦は多少困惑していた。

「よおもまあ、手柄は早い者勝ちとは言ったもんだわ」

「せやな。あの学園の西洋魔術師は中々やりよるしなあ」

黎明が激を飛ばした場所から少し離れた山岳地帯。

そこは斑鳩の前線基地ということでキャンプが張られていた。

尤も、使用する者は僅かであり、多くは単独行動なのであまり意味を成してはいない。

利用するのはせいぜい隊長の黎明、付き従う月詠、最近付いて回る小太郎程度である。

「隊長達も行ったみたいやなあ」

「でもまあ、正直アホのやる事や」

十人の男女がバラバラに座ったり、立ったりしながら会話をしている。

それも雰囲気はあまり良くない。

「弱っちいクセに粹がるアホはさっさと死んだし、あっちの実力も大体解った」

「正規の斑鳩が動く、って事だね」

「ああ」

正規の『斑鳩』。

本来の斑鳩は隊長の黎明を入れて11人である。

そこに今回の作戦で強硬派のメンバーの大半を取りこみ、人数は30人弱に増えた。

激と飛ばした時、いなかったのは「下準備がある」などで人払いの結果を張っていたからである。

それでも大半は返り討ちで死亡したが。

「さあ…宴はこれからだ」

第八話（後書き）

なんかグダグダかも。

まあ、気が向いたららの更新なので……。
PV、ユニークアクセスが大幅増加。

ありがとうございます！

ポイント評価、感想を頂けると嬉しいです。
いや、ホント。

第九話（前書き）

のんびりいきますよ。ええ。

第九話

【学園長、こちらの担当地区は鎮圧。現在、警戒中です】

【了解じゃ。宜しく頼むぞい】

北の地区ではガンドルフィーニらも戦闘を終えた。

狼鬼という強力な援軍を得た為、楽であった。

しかし、狼鬼は危惧していた。

それは敵の第二陣である。

物量で攻められた為に疲弊した魔法教師が二人。

それに、実力は低くもないが高くもない。

狼鬼からすればお荷物であったのだ。

そこへ、念話が入る。

【主！狼鬼！蜘蛛！至急援護をッ！黎明だ！】

【了解】

【御意】

狼鬼と蜘蛛はすぐさま龍鬼のいる場所へと向かう。
しかし、晴宗の返事が無い。

【主！？どうした！…念話妨害か！】

【…そのようだな。一分後に到着する。凌げ】

【…主は交戦中。妨害も入っている】

蜘蛛鬼が静かに報告する。

若干の苛立ちが声に含まれる。

敵の行動が突発的なものもある。

そもそも、晴宗達は初期襲撃段階で敵の総大将とも言える安倍黎明の参戦を予期していなかった。

というのも、黎明はこれまでの戦いではまず最初に表に出ず、裏で着々と準備を進めて盤石の状態で参戦する事が多かったからだ。

甘い、と言えばそれまでであるが。

「『輝く覇道』」

「…ッ！」

「ッオオオッ！！」

龍鬼はタカミチを庇う形で盾になり、両腕の巨大な手甲で防ぐ。

が、それでもダメージは大きい。

黎明は上空にいる烏鬼^{うき}の炎の弾による援護射撃を受けつつ、もう一体召喚した鬼の『麒麟鬼^{きんき}』で数的有利を作り出し、タカミチと龍鬼という猛者を相手に有利に戦っていた。

タカミチと龍鬼のコンビネーションが取れてない事に対し、見事なコンビネーションで戦う黎明らであるのも加わっていた。

「…流石、やりますね」

「いやあ、参るねこれは」

一旦距離を取って次の動きへの牽制に入る。

「疾風・月狼」

「森羅・千手」

「「!!」」

黎明と麒麟はすぐさまバックステップで後退し、そのすぐ後に黎明らがいた所に巨大な風の刃と化した衝撃波と幾重にも張り巡らされた糸が直撃。

黎明は冷や汗をかいた。

「何それ怖い。てかガチ殺しか」

「不利です。撤退を推奨します」

「させるか」

狼鬼、龍鬼、蜘蛛、タカミチがすぐさま追撃する。

「烈火・炎障壁」
えんしょうへき

上空に待機していた烏鬼が一瞬で地上に降り、炎の壁を張る。

「…」

「不覚だな」

爆音と共に生み出された煙が消える時には、そこに黎明らの姿は無かった。

「それで？結局小太郎とは引き分けか」

「…はい…」

敵の襲撃が一旦止み、飛燕は晴宗と合流していた。

「まあ、近接戦が苦手なお前にしてはよくやったんじゃない？」

取り敢えずお疲れ、と飛燕は晴宗に声をかけてその場を去る。

飛燕は刹那の事が気になっていた。

成長していたとはいえ、斑鳩の正規メンバーが相手では分が悪すぎるからだ。

近右衛門にもそれを報告したが、「問題無いぞい」と一蹴。

飛燕はその後頭部を斬り捨てようとしたがなんとかとどめていた。

「刹那！」

飛燕は瞬動で刹那のいた場所へと向かい、合流。
そこにいたのは――

「…鶴子？」

「おはようさん、アナタ♪」

思いつき笑顔な鶴子。
しかし。

（目が…笑っていないだと…ッ!?!）

飛燕は取り敢えず半殺しを覚悟したという。

「いやー、危ねー。狼鬼達マジで殺しにきやがった」

「あークソ。なんでハル兄いと引き分けたんやろ」

ベースキャンプでは黎明が溜息交じりに煙草を吸い、小太郎は落ち込んでいた。

「ハル兄いに近接戦で引き分けてもーた…弱いなー…」

「ウジウジしてたらあきまへん」

「あ、千草姉え」

そこに、天ヶ崎千草が数本の花や草を抱えてきた。

「千草…何それ？」

「次への準備どすえ。それにしても、第一陣壊滅なんてアカン展開どすなあ」

「そうだな。しかし、これでやりやすくなった」

「へ?」

「あいつらには悪いが、雑魚術師だしな。それでも向こうの戦力を
図るのに役立ったからいいけど」

（それに、ここまでは計画通り…ここからだな…）

黎明は紫煙を吐き出す。

それが風向きのせいで小太郎の処へ向かい、彼は手で煙を払いのける。

「千草、正道らに通達出しといて。『今日明日は襲撃中止、明後日
正午から再開』って」

「了解どす」

そういつて千草はその場から消える。

「何でそんな事したんや？」

「ん、一旦爺い共に報告」

そう言つて黎明は吸い殻を術で燃やし尽くし、テントの中へ入って
行った。

翌日。

晴宗は真剣な顔つきで駅前に立っていた。

元々整った顔立ちなので、すれ違うさなかに彼の表情に顔を赤らめる
女性が多い。

リア充ばくはも(略)

その隣には同じく真剣な表情の刹那。

「刹那：試練ですね」

「そうですね：あ」

「せっちゃん、ハル君、ゴメンなー待たせてもうて」

そこへ、木乃香が走ってやってきた。

そう。三人はこれからお出かけという名の試練に行く。

試練、そりゃもう色んな意味で。

前日、寮に帰った二人と木乃香がバッタリ会い、お出かけの約束を強引に取り付けられたのだ。

一方飛燕は――

「ハイ。スイマセンデシタ」

「解ればよろしおす」

一晩中説教。

何故自分を差し置いて任務へ向かったのか。

それも東へ。

飛燕は基本的に一人、もしくは晴宗と任務へ向かう。

鶴子は飛燕との結婚を機に剣士を引退し、道場で後続の指導にあたっている。

しかし、鶴子の手が空くと飛燕と共に(晴宗はオマケ的に)任務に向かう。

麻帆良出発時は鶴子も行けたのに黙って出て行ったのだ。
つまり大目玉である。

「ほな…」

鶴子はスルスルと服を脱ぎだす。

「仲直りのお楽しみと行きますえ」

という訳で大人の時間へ。真昼間から。

第九話（後書き）

短いかもしれませんが更新〜。

次回はのんびりでもいきますかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8678m/>

陰陽師と魔法使い

2011年10月9日16時37分発行